

村田瑞枝 おもと絵

三光園 おもと・歴史・名鑑・絵・美術鉢・道具





おもとを描き始めてもう20年
庭の片隅のおもと程度しか見た事
が無かったものですから、最初に持
ち込まれた、おもとを見て大変驚い
たものでした。いざ描き始めても、
どのあたりから見てよいものやら、
どこを中心に描いたらよいのやら、
全く見当もつかず、むずかしいもの
だなりと思いつながら唯むやみに描い
たのを覚えております。それから三
光園さんに通っては、夜の十一時頃
まで粘ってデッサンしたり、デッサ
ンして帰って、いざ色付けという段
階で、どんな色をしていたのか思い
出せなかったり。いまだにそういう
ことが続いています。

今だにおもとはわからないし、買っ
て作ろうとも思わないですから、おも
いっこうに覚えません。でも、おも
とを描くのは好きで楽しいものです
よ。



『展示会獅子の雄姿と美術鉢』： 獅子おもとが、美術鉢に植えられ、展示会での一場面を切り取ったような感じを、緻密に描写した作品です。450×300 和紙に岩絵の具・金・銀などを用い鉢の白い点は鉢のイッチンを模して絵具を盛り上げて描いている



『クラゲ』：鉢から抜いて水の中に浮かんだおもとを描いています。切り絵版木の形を見て、クラゲに見立てたのではないのでしょうか。
220×140 和紙に岩絵の具で色付けした物を張り絵根は 岩絵の具彩色

江戸時代の浮世絵に見られる『おもと』脇役と主役



嘉永三年1858年「宝成金菊月」一陽斎豊国三代（歌川国貞）歌舞伎役者絵 播州皿屋敷の一場面
お菊物語の一場面 左棚前段 おもと鉢植え 役者絵の脇役で鉢植えおもとが描かれています



江戸慶應3年1867年「おもと絵」藤浪龍 多賀丸 源好筆
堂々とおもとが主役の錦絵です

三光園おもと会報と村田瑞枝

表紙を写真から、おもと絵にすることで、おもとの魅力を伝えるために、日本画家の村田瑞枝を紹介され、昭和36年1963年会報5月号から、村田瑞枝が表紙絵を描くこととなります。

そのころ、村田瑞枝は、院展院友画家で、囲碁雑誌の表紙絵を担当しており、三光園主の兄、忠蔵氏が、登用したようです。三光園主榊原八朗もその出会いには、感嘆しており本書にもその様子が書かれた項もあります。

瑞枝は、三光園会報の表紙絵を、多くの時間をかけ、三光園に足を運び、おもとを観察し、デッサンし、下書きを行い。様々な表現方法を使い1990年5月95号まで描き続けています。

先に述べている通り瑞枝は、おもと栽培はしておらず、おもとの絵を描くことに魅力を感じ描き続けていたのでしょうか。はたまたおもと趣味者と同じく、古（いにしえ）から続く、おもとの魅力に取りつかれていたのかもしれませんが。また三光園側でも、廃刊までの長い間、瑞枝の絵を使い続けています。三光園もまた瑞枝の絵に魅了されていたのでしょうか。

瑞枝との出会いは運命的なものがあったのだと、三光園主榊原八朗も述べています。瑞枝の亡くなった後でも、なお双方のつながりは続いており、子供のいない瑞枝の姪や甥とは手紙でやり取りをしているようです。

今でも三光園主の奥さんが、瑞枝の事を語る様子は、生き生きとした様子で私に話してくれ、瑞枝に心底魅了されているのだなと感じられます。

我々おもと趣味者もまた、その三光園会報、三光園発行の多くの書物、協会会報などで、瑞枝の絵を目にし、知らず知らずのうちに、全ての者の心に瑞枝の魂が焼き付いているのではないのでしょうか。瑞枝の絵は、飛騨高山市に寄贈された44点が、行き先がわかり現存しています。

昨年も生誕110周年で展示会が開かれました。大作はその迫力で見ると見る者の心を奪う迫力のある作品だと、三光園主の奥さんは語っています。

事おもと絵についてはどうでしょう。会報を見る限り、様々な技法を駆使し作品を描き続けていたように思われます。瑞枝自身もこの仕事で、絵の勉強をしていたのではないのでしょうか。

おもと絵に関しては、三光園との密な関係のおかげで、資料が多く残されており、小さな作品は、切り絵の技法を使ったり、切り絵を版木として描いたりもしています。

また、大きな作品は、瑞枝の大作同様、岩絵の具・金采・銀采・鮮やかな黒色などを使い得意な技法で描いたのではと思われる絵も見られます。またそのデッサン、下絵、切り絵の材料、切り絵版木なども多く残されています。

一つの作品が描かれるまでの過程も感じられる資料が、残されていることは、家族のいない瑞枝にとっても素晴らしいことだと私は思います。

しかし惜しむらくは、私が瑞枝との面識もなく、一語りべとしてだけで、執筆していることだと思えます。なるべく多くの事実を伝えたく書いていますが限界のある事ご容赦ください。

瑞枝と三光園は、相思相愛の関係であったと、本書では述べさせていただきます。

『美術鉢』

瑞枝の書く美術鉢には味があり本物とは違う味わいがあります。美術鉢の描かれた作品も多く残されており、それぞれに魅力ある作品となっています。



明治初期から中頃には、完熟し、おもとの為に作られた楽焼の美術鉢。昭和の初め頃までは、京都、三河、東京などで、加茂黒釉薬を使った素晴らしい鉢が作られています。手の込んだ作りの鉢は、それだけで美術観賞価値があります。オーダーメイドの鉢たちは、作られた時に、植えるおもとに合わせて制作された事でしょう。現在は、植える萬年青と調和させることが、趣味者の腕の見せ所です。



富士と雲図 美術鉢

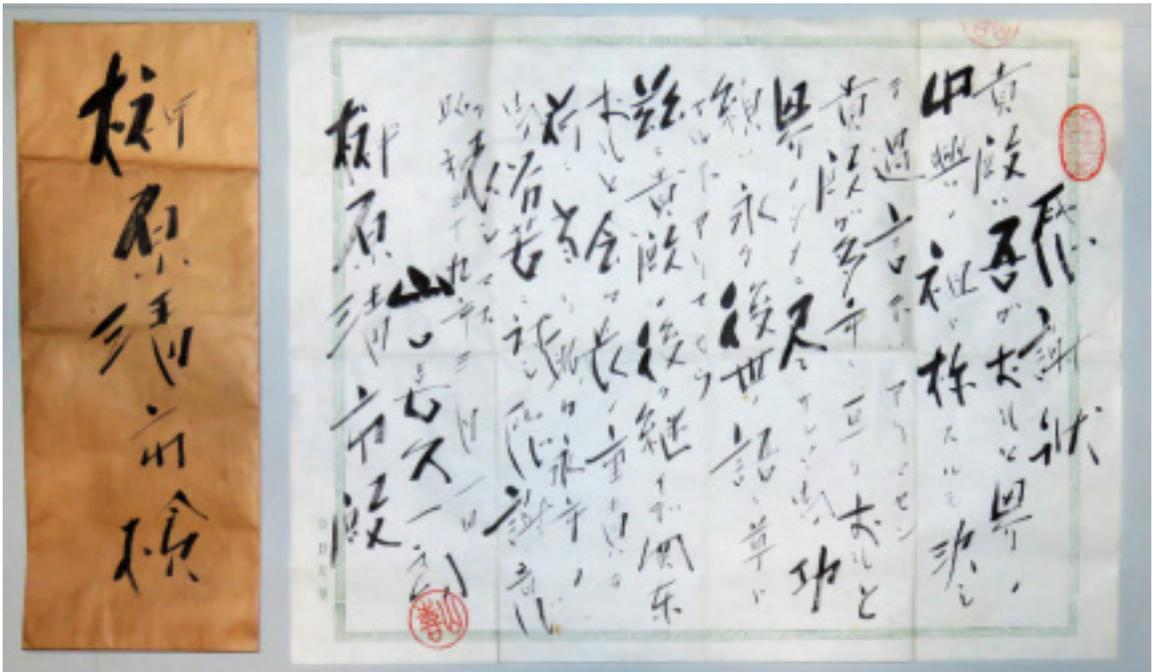


五柳作画最高傑作の一つ美術鉢



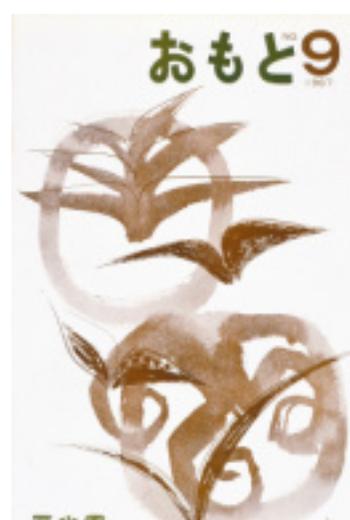
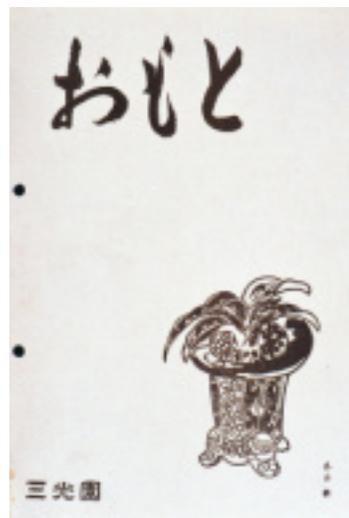
三光園

2代目三光園主 榊原三光園初代 榊原清市



国務大臣 山口喜久一郎による榊原清一に当てた感謝状

『三光園会報おもと』と 三光園ゆかりの品（5号から瑞枝の絵）



三光園縁起

三光園の創立については、残念ながら確実な資料が残っていません。

三光園の『萬年青銘鑑』で現在資料がある最も古い名鑑は、大正10年に発行された名鑑です。それによれば、この頃、吉田由造（由蔵）が、東京市下谷区入谷町60番地で三光園を名乗り営業していたことがわかります。創立者である吉田由造は、慶応2年（1866年）の生まれですので、すでに還暦も過ぎ、円熟期に入っており、業界での信用も厚かったことと思います。

三光園という園名についての由来は、吉田が深く信仰していた守護神の三光稲荷から、三光の2字を貰い受けて、三光園と名づけたという事です。

大正10年『萬年青銘鑑』には、号数が記入されています。第何号に該当するかはわかりませんが、昭和2年に三光園が発行した萬年青銘鑑には、第8号と記されていますので、途中に欠略がなかったものとして、遡ってみれば、大正9年には第1号の『萬年青銘鑑』を発行していたでしょうし、この大正10年発行の名鑑が、第2号になるのではないのでしょうか。そうすると、大正8年には三光園は開園していたものと推測されます。

その頃の、東京には、肴や・篠常五郎は別格の業者であったとしても、宝生園・鈴木勝

次郎、衆草園・新井仙之助、園芸植物研究会・高橋弥三郎および植木商・遠藤才次郎や衆楽園・高橋喜七といった面々が、おもと商を営んでおり、ほかにも数多くの業者がおもと商を営んでいたといえます。

そして、趣味家の数も、現在のそれに比較してみても比べものにならないほどに多くいたであろうといわれています。のちに、三光園を大成した榊原清市は、そうしたなかの業者のひとりであった、宝生園・鈴木勝次郎のもとで、専らおもと道の修業に専念していたといえます。

このころの宝生園は、通称桶勝とも呼ばれ東京府北豊島郡巢鴨町上駒込124番地にあり、萬叢園・松谷正太郎氏の邸宅とは目と鼻の先の位地にありました。榊原清市は、昭和36年、三光園が本誌の前身として出した、カタログ『おもと』第4号の中で「私は明治41年秋14才で初めて上京し、父の友人、鈴木勝治郎氏方へ寄宿する事となりました。

同氏はその頃東京にあった数多いおもと商人の一人で、駒込吉祥寺に住み約500程のおもとを持って居りました。（原文のまま）」と述懐しています。

榊原清市は、明治28年9月10日、愛知県海東郡佐織村大字佐折26番（同県津島市）で、おもと商を営む父・榊原儀右衛門と母・

か禰の間に長男として生まれました。清市が述懐しているように14才（数え年）でこの

道に入り、鈴木勝次郎のもとで相当に厳しい修業を積んだといえます。

当時は、病虫害の駆除にしても現在のような優れた薬品はなく、持ち運びに便利な鉢掛枠といった物もなかった事でありますから、一つ一つ運ぶその労力も大変なものであったと思います。前出の「おもと」第4号で、彼は続けて「足かけ15年漸く信用されボツボツ商売も出来る様になったので、27才で鈴木方を出て、中野の鍋屋横丁に世帯を持ち、ささやかながら三光園の名前を掲げました（原文のまま）」とも述べています。

清市が、27才（数え年）で独立したというのは、大正10年の事になります。ここで吉田由造の営む三光園と榊原清一の2件の三光園が同時に現れ、前人の聞き取りや資料には書かれていないので、詳しいことはわかりませんが、このころの清市は、まだ三光園・吉田由造との間に

『三光園開業当時の名鑑と各年代の名鑑』
江戸時代から続くおもとの名鑑（番付表）令和の現在も毎年発行されています。
ここに紹介するのは三光園の名鑑です。上段は大正10年第一号と言われる名鑑



大正10年三光園名鑑最古の資料



大正11年 現物が確認でき三光園最古の名鑑

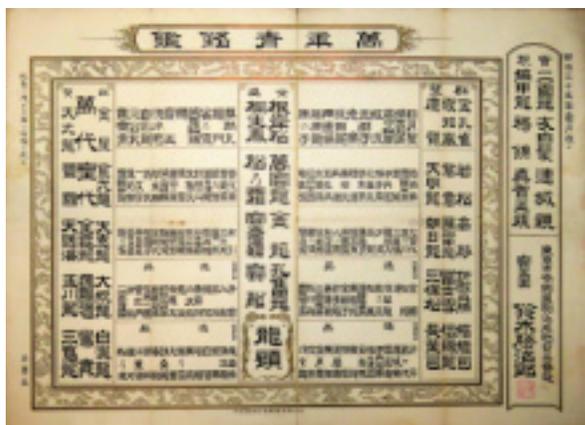
三光園縁起本文中に出てくる、明治・大正時代の東京のおもと業者萬年青名鑑



明治29年 根岸肴屋 篠常五郎



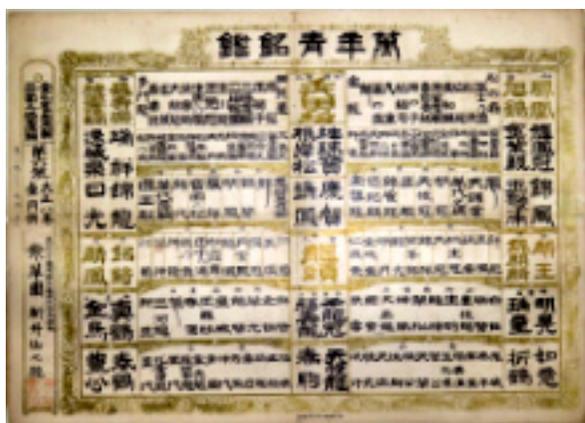
明治32年 萬叢園 松谷正太郎



明治35年 宝生園 鈴木勝次郎



大正7年植木商 遠藤才次郎



大正8年 衆草園 新井仙之助



大正12年 園芸植物研究会 高橋彌三郎

日昭和二十三年三月十日 主催 東海萬年青連合會

場所 愛知縣津島市平野分 大會事務所 愛知縣海部郡佐屋村日置
服部 弘方

萬年青品大會

余興 來客者へ三光園寄贈の宝藏呈上

(宝藏内容 出品萬年青中級品三十鉢以上買上テテ賞品トス)

故 平野秀夫
横井庫之輔
堀尾安三郎
服部榮太郎
川澄寅次郎

外物故者

品評 劍舞覆輪 長生殿覆輪 豐祥冠 長命樂 鳳

以上親木三位

地球寶 鳳冠 鳳

紫雲殿 吹二三位

席之子 吹親混合十位 但ス一本 最優等ニ。 優等一。 一等 以下賞呈

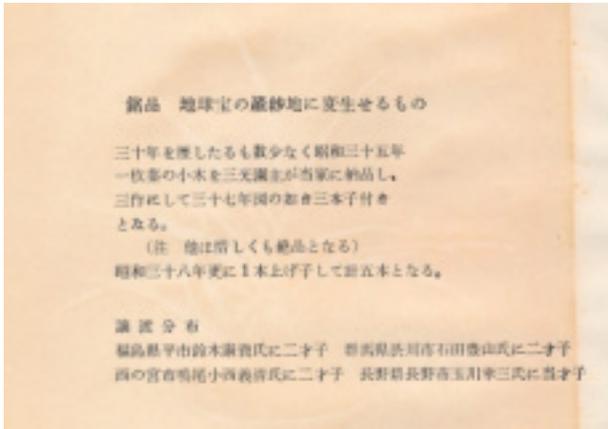
品種問六 優秀品五位 一人一鉢

白鳳 吹 最優等五。 優等三。 以下三位

品評種目 受附十一時限

三光園縁起本文中に出てくる昭和23年東海萬年青連合會 萬年青品教大會 大會ポスター

神品の披露宴記念品写真〈旭光宝、晃明殿の図、千代田松の図〉 大会での写真〈鸞鳳〉



旭光宝記念品写真説明



旭光宝記念品写真



晃明殿の図記念品写真



晃明殿の図記念品写真説明



千代田松の図記念品写真



千代田松の図記念品写真説明



鸞鳳と火屋と銀皿当時写真

昭和36年1956年07月02日晃明殿の図お棚割披露会in銀座
三光園縁起本文中に登場する人物たちの集合写真

